

令和4年度八代市立第八中学校校内研修計画

1 校内研修 研究テーマ

「能動的に学び続ける生徒の育成」

～生徒が「わかった!」「できた!」と感じる授業をとおして～

2 研究主題設定の理由

(1) 今日的教育課題から

新学習指導要領においては、「社会に開かれた教育課程」「資質・能力の三つの柱(①個別の知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力・人間性等)」「主体的・対話的で深い学び」、あるいは各教科を学ぶ本質的な意義と「見方・考え方」、教科横断的な視点からの「カリキュラム・マネジメント」といった様々なキーワードが出されている。これらはすべて「何をどのように学び、何ができるようになるか」を、学校教育の意義や価値として明確にしながら生徒たちに育んでいこうということにつながっている。生徒たちに育んでいるのは、陳腐化するような知識や力ではなく、どのように社会が変化していても、その中で生きような力である。激しい変化の中で改めて学校教育や教育課程の意義を捉え直し、それを可視化・共有化し「資質・能力」を育んでいく必要がある。

また、学習指導要領改訂に伴い、観点別学習状況の評価が四観点から「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点に変更された。「思考・判断・表現」は、現代社会における「生きる力」の中でも特に重視されている問題解決能力に関する力と言える。問題を見つけ論理的に考えて解決まで導ける力や、仲間と協力しながら問題に取り組むための表現力などの獲得を目標とする。各教科の知識や技能を問題解決に向けて有効に使えることも評価の要素となる。「主体的に学習に取り組む態度」は、各教科の内容を理解するために、生徒が「いかに粘り強く取り組み、自らの学習を調整して、知識を習得するために試行錯誤しているか」という部分を評価していくことになる。見た目の意欲だけにとらわれないという意味では、教員が一人一人生徒をより細やかに観ていくことが求められる。

以上のことを踏まえ、指導の改善及び創意工夫を図り、生徒の問題解決能力や自主性、思考力等を育む授業実践が求められている。

(2) 本校の実態から

本校では、「生徒の夢を育み、生徒と地域の未来を創造する教育～成長を実感できる学校(生徒も、職員も、保護者・地域も)～」の学校教育目標の下、全職員が協働して子どものよさや可能性を見だし、それを伸ばす教育実践を日々行っている。生徒数が少ないので、一人一人にきめ細かな指導をすることができる強みがある。

本校生徒は、全体的に明るく素直な生徒が多く、授業や学校行事、部活動などまじめに取り組もうとする姿勢が感じられ、落ち着いた学校生活を送っている生徒がほとんどである。しかし、学習をはじめとするいろいろな活動に対して、自ら意欲を持ち主体的に取り組んでいるかという視点から見ると、まだまだ不十分な点が多く見受けられる。教師や親から言われたからやるというような指示待ち的な傾向が感じられる場面も多い。また、集団の中で自分の伝えたい意見や感情を適切に表現できないという状況も、授業や日常の諸活動を見ているとよく遭遇することがある。その要因には、基礎的・基本的内容の確実な定着ができていなかったり、見通しを持ち計画的に学習することができなかったりするなど、基礎的な学習スキルが不足していることが挙げられる。また、学力不振や自己の個性や適性についての認識の不十分さなどから、自分に対しての自信が持てず、将来に対して明るい展望が見いだせず、自己肯定感や自己有用感、向上心などが低い生徒も見受けられる。自分に自信を持ち、何事にも意欲を持って主体的に生きる力が必要と考えられる。さらに、自分自身を「みつめる力」、学んだことを自分たちの生活に「つなげる力」、先のことを「みとおす力」が本校生徒に身に付けさせたい3つの資質・能力であると考ええる。

県学力学習状況調査の生徒質問紙(i-check)の結果より、学習習慣・意欲について令和3年度の自校の結果を見てみると、「あなたは、授業や日常生活の中で、不思議だな、どうしてだろう、と思ったことを調べていますか」という質問に対して、「いつも調べている」「だいたい調べている」と回答した現2年生は46.7%(県42.3%)、現3年生は50.0%(県42.9%)であった。また、「勉強するときは、自分で計画を立てていますか」という質問に対して、「いつも立てている」「だいたい立てている」と回答した現2年生は46.7%(県51.5%)、現3年生は55.6%(県46.9%)でわずかに県平均を上回っているものの、本校の生徒の学びに対しての実態としては、約半分の生徒が受け身であり、学習への主体性は比較的低いと考えることができる。さらに自己肯定感についての自校の結果を見てみると、「自分には、いいところがあると思いますか」という質問に対して、「ある」「自分なりにある」と回答した現2年生は53.3%(全国65.2%)、現3年生は61.1%(全国63.8%)であった。また、「勉強やスポーツ、習いごと、趣味などで、自分なりに自信をもっていることがありますか」という質問に対して、「ある」「自分なりにある」と回答した現2年生は73.3%(全国76.3%)、現3年生は66.7%(全国72.%)でどちらも全国平均を下回っている。

そこで、前述の実態を踏まえ、本校生徒の課題を解決するためには、能動的に学び続ける力を育成していく必要がある。そのためには「学び合い」をめざした授業づくりに努め、「主体的・対話的で深い学び」を実現させることが求められる。「学び合い」により、自分の考えを積極的に伝えたり、交流したりしながら、学習意欲を高め、さらに、自分の意見が周りの仲間から認められることで、生徒自身が「わかった」「できた」と思える喜びと自己肯定感を感じさせることが、能動的に学び続ける意欲に繋がると考え、この研究テーマを設定した。

学習意欲の側面も含め、生徒一人一人が学習内容に興味・関心を抱き、主体的・意欲的に学習に取り組むことができるよう組織的に授業実践を展開し、研究テーマを具現化していく。

3 研究の仮説

〈仮説1〉

教師が「学び合い」をめざした授業づくりに努めることで、「主体的・対話的で深い学び」が実現し、生徒の考えを深めたり、広げたりすることで、「わかった」「できた」と実感できるだろう。

〈仮説2〉

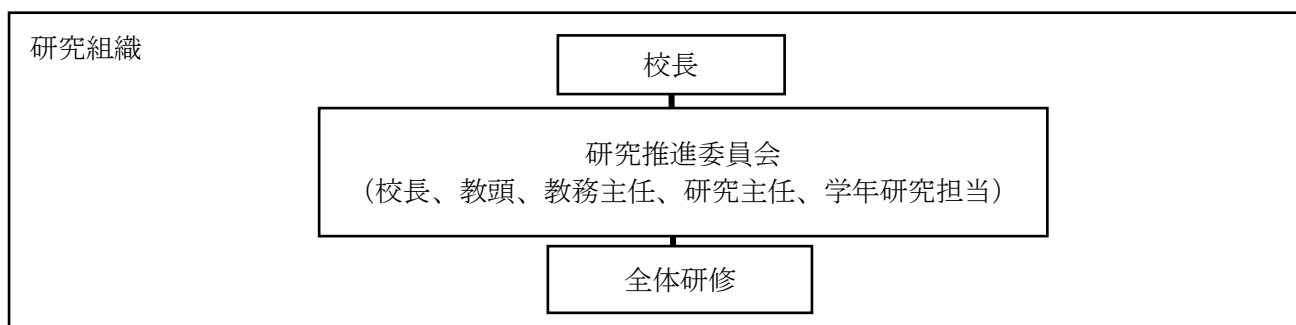
教師が「学び合い」をめざした授業づくりに努める中で、生徒同士が考えや意見を交流し、自分の考えや意見が認められることで、生徒の「自己肯定感」が高まるだろう。

〈仮説3〉

生徒が学びの中で「わかった」「できた」と実感し、「自己肯定感」を高めることで、「能動的に学び続ける生徒」が育成できるであろう。

4 研究組織

研究推進委員会(校長、教頭、教務主任、研究主任、学年研究担当)を定期的に開催し、研究活動を推進していく。



5 校内研修の意義

(1) 自己課題の意識化

学校教育目標の具現化に向け校内研修を機能させ、教職員一人一人が学校全体の教育課題を自己課題として認識し、研究を深め、修養を積む。

(2) 研究授業を通じた授業改善

次のことをねらい、研究授業および事後の授業研究会を実施し、各教師の授業改善を図る。

- ア 課題を共有し、課題解決に取り組む。
- イ 各教師の実践を互いに学び合う。
- ウ 各教師の指導力を高める。
- エ 研究の成果を共有し、生徒の成長を実感する。

6 研修内容

(1) 教科等授業研究

- ・校内研究テーマに基づく研究実践を積み重ね、授業改善を図り学力向上につなげる。

(2) 教職研修（人権感覚を磨く研修・専門性を高める研修・社会性を高める研修）

- ・各種及び各分野の研修を行い、教育活動の充実・改善を図り、豊かな心や健康・体力など生徒の健全育成につなげる。

7 研修方法

- ・全体研修の時間を水曜日とする。（B日課：15：45～、D日課：16：00～）
- ・課題や取組等の共通化を図り、組織的に実践を展開する。

(1) 教科等授業研究

- ・教科等教育研究は年間一人1回以上の研究授業を行う。その後の授業研究会の反省を踏まえ、その課題改善を図る授業を行う。
- ・教科等教育研究における研究授業は、各学期1回の大研（全員参加）と、授業以外の教員が参加する小研という形態「ミニ・来て・3観」とする。

(2) 教職研修

- ・各校務分掌における校外研修の復講を行い、共通理解・共通実践につなげる。
- ・喫緊の課題等について外部から講師を招き、その課題解決に向けた研修を深める。

8 研究の実際

(1) 研究内容

①理論研究

- ・新学習指導要領及び「熊本の学び推進プラン」の理念や方針について理解を深める
- ・「主体的・対話的で深い学び」を実現する指導についての研究

②教材研究

- ・各教科で生徒の興味・関心が高まるような単元デザインや教材の開発
- ・対話的な活動における課題内容や進め方の研究

③授業研究

- ・研究の仮説に基づく日々の授業実践

(2) 具体的な取組

①各教科における授業改善（授業参観の3つの観点）

- 一、生徒の思考過程に基づいた指導展開や学習課題の設定・発問の工夫が行われ、「学び合い」をとおして生徒の考えが深まったり、広がったりしているか。
- 二、振り返りの時間などで、生徒自身が「わかった!」「できた!」と実感し、自己肯定感を高め、次の学習につなげることができているか。
- 三、単元のまとまりを意識し、単元終了時の生徒の姿に近づき、能動的に学び続ける力がついてきているか。

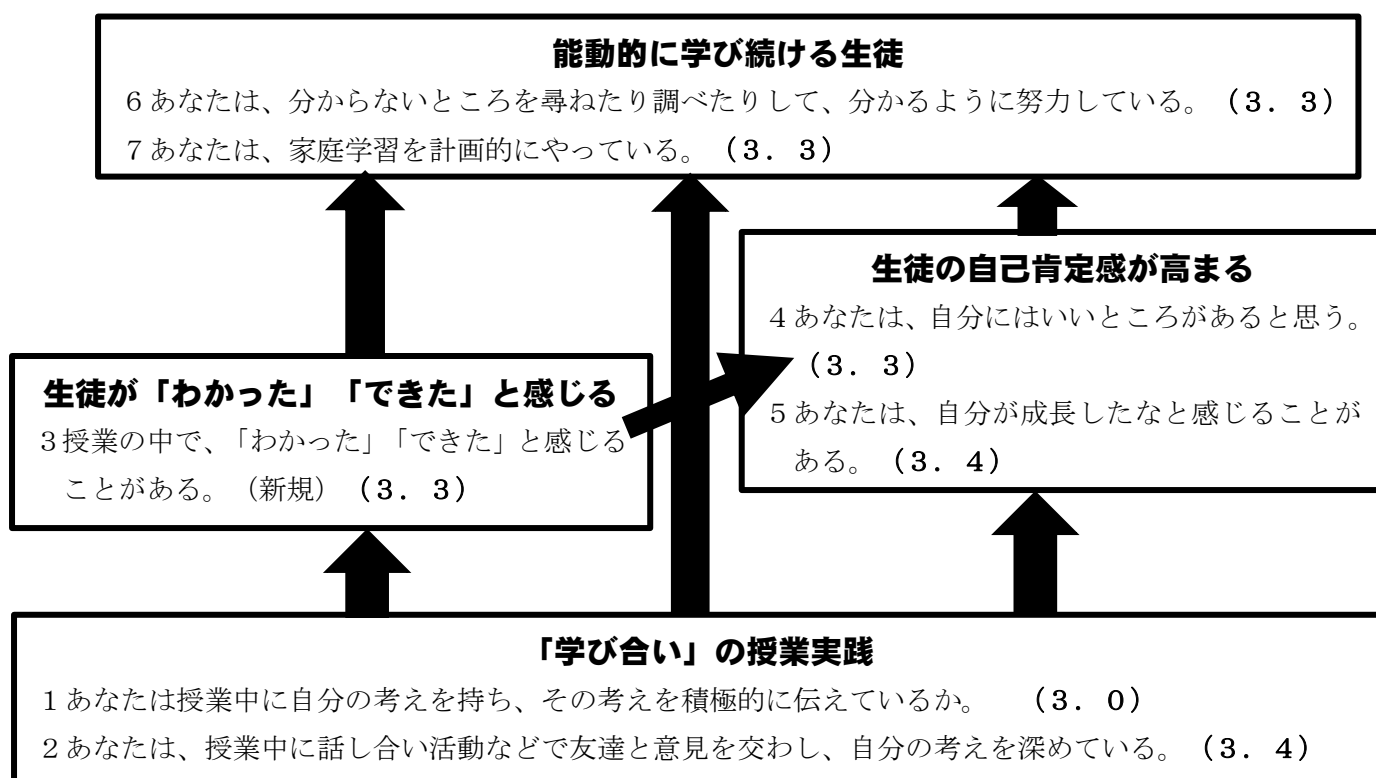
②授業研究会の在り方

- ・協議の柱を焦点化し、教科の壁を越え、生徒の学びの視点から協議を行う。

③研究の成果

学期毎に行われる学校評価アンケート（生徒アンケート）において、以下の項目の数値目標を設定し、達成を目指す。

質問項目	R3（全体）	R4 目標値 （全学年）
1 あなたは授業中に自分の考えを持ち、その考えを積極的に伝えているか。 （タブレット・ペア・グループも含む）（対話的で深い学び）		3. 0
2 あなたは、授業中に話し合い活動などで友達と意見を交わし、自分の考えを深めている。（対話的で深い学び）	3. 2 1	3. 4
3 授業の中で、「わかった」「できた」と感じることもある。（新規）（深い学び）		3. 3
4 あなたは、自分にはいいところがあると思う。（自己肯定感）	2. 9 3	3. 3
5 あなたは、自分が成長したなと感じることがある。（自己肯定感）	3. 2 6	3. 4
6 あなたは、分からないところを尋ねたり調べたりして、分かるように努力している。（能動的）	3. 1 7	3. 3
7 あなたは、家庭学習を計画的にやっている。（能動的）	3. 0 6	3. 3



令和4年度 第八中学校 校内研究構想図

学校教育目標

生徒の夢を育み、生徒と地域の未来を創造する教育
～成長を実感できる学校（生徒も、職員も、保護者・地域も）～

目指す生徒像

- ・ お互いを尊重する生徒
- ・ 郷土宮地を愛する生徒
- ・ 夢実現に取り組む生徒

校内研究テーマ

「能動的に学び続ける生徒の育成」
～生徒が「わかった!」「できた!」と感じる授業をとおして～

生徒が「わかった!」
「できた!」と感じる

生徒の
自己肯定感が高まる

「学び合い」の授業実践

学習規律の確立

支持的風土のある学級づくり

教師の願い

- ・ 自分の考えを持ち、能動的に学び続ける学習集団の育成
- ・ 夢や希望を持ち、その実現に向け自分の力で未来を切り拓いていく基礎学力の向上、及び思考力・判断力・表現力の育成

生徒の実態

- ・ 指示されたことには真面目に取り組むが、主体的に学ぶ姿勢が不十分
- ・ 協働的な学習の経験不足、及び学び合いのスキルの定着が不十分
- ・ 学習の中で新しいことを発見したり、多様な見方や考え方をしたりするのが苦手